

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00320

研究課題名(和文)書簡・雑記資料を中心とした17～18世紀学芸史の研究

研究課題名(英文) Research on the Japanese academic history in 17th and 18th centuries, focusing on letters and miscellaneous materials

研究代表者

川平 敏文 (Kawahira, Toshifumi)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：60336972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来の文学・思想研究では取り上げられることが少なかった書簡・雑記資料に焦点を当て、その意義を考察しようとしたものである。具体的には、(1)17世紀後半の長崎の漢学者盧草拙の許に届いた書簡を集めた『盧氏文書』、(2)18世紀前半の儒学者室鳩巢がその弟子に当てた書簡を集めた『兼山麗澤秘策』、(3)18世紀後半の儒学者湯浅常山が友人の井上四明に当てた書簡を集めた『先君子与仲龍書』の三資料について、その翻刻や人名・書名データベースなどを作成・公開するとともに、考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回取り上げた三点の資料は、いずれも漢文体であったり、候文(そうろうぶん)体であったり、未翻刻であったりして、資料としてはやや取り扱いにくいものであった。ゆえに従来は本格的な調査がなされていないが、その資料性の高さはつとに認識されていた。とくに人名や書名などは、彼らがどのような交友圏にあり、どのような書物について関心をもっていたかが具体的に知られる重要な情報である。今回の翻刻や人名・書名データベースの公開は、17～18世紀学芸史の研究に大いに資するところがあると思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the significance of letters and miscellaneous materials, which have not been taken up in literature and thought research. Specifically, the reprint of the following three documents and the database of names of persons and books were made public and examined.

(1)"Roshi-monjo", a collection of letters sent to Sosetsu RO, a scholar of Chinese classics in Nagasaki in the latter half of the 17 century, (2)"Kenzan Reitaku hisaku", a collection of letters sent to his disciples by Kyuso MURO, and (3) "Senkunshi Churyu ni atauru sho", a collection of letters sent to his friend Shimei INOUE by Jozan YUASA, a Confucian scholar in the first half of the 18 century.

研究分野：日本近世文学

キーワード：書簡 雑記 随筆 盧草拙 室鳩巢 湯浅常山

1. 研究開始当初の背景

江戸時代は、漢学（中国学）・和学（日本学）・洋学（西洋学）など、さまざまな分野の学芸が複雑かつ高度に展開された時代であった。そこで生み出された著述のなかには、今日に至るまで「古典」として読み継がれ、参照され続けているものも少なくない。

いっぽう、それら「古典」が成立した周辺では、当然のことながら、たくさんの文書資料が生み出されていたはずである。たとえば、今日でいう「研究ノート」「覚書（メモ）」「書簡」の類がそれである。これらの資料は、内容的には私的、形式的には雑駁であるものが多く、どうしても周知的・二次的な扱いを受けがちであった。しかしそれらのなかには、その人物の学問・思想の深層、人的交流の実態、当時の学芸界の志向性などについての「生」の証言が往々にして見られ、決して等閑視されるべきものではない。

また、これらの資料のなかには、たとえば「日本随筆大成（正・続）」全九三巻のような叢書のなかに翻刻して収録されているものも、確かにある。だが、概してそこで取り上げられるのは、比較的読みやすい和文系の資料に偏る傾向があり、漢文体の書簡資料や、漢文訓読系の片仮名資料などは、いまだに埋もれたままのものが多い。このようなバランスを欠いた方法では、学芸史の真の姿はとうてい描き出すことができないだろう。

そこで本研究では、資料的価値が高いものながら、これまで未翻刻・未紹介だった資料、あるいは比較的よく知られたものでありながら、十分な本文批判が行われてこなかった資料を三点取り上げ、それらの基礎的な調査・研究をふまえて、さらに現在の学芸史にかんする通説を批判的に検討してみたいと思う。

2. 研究の目的

具体的には、次の（１）～（３）の三つの資料を中心として、個別の研究テーマを展開する。また、それらを統合的に研究するための基盤作りとして、（４）のテーマに着手する。

（１）ろ そうせつ 盧 草拙『盧氏文書』（写本二冊、九州大学古賀文庫蔵）

十七世紀における儒学界を代表する学派といえ、朱子学派と陽明学派であろう。しかし、十七世紀から十八世紀にかけて、九州長崎の地において育まれた儒学は、老荘学、天文学、唐話学などの要素が多分に入り込み、純粋な朱子学・陽明学とは一線を画している。長崎ではなぜこのような学問が発達したのか。唐通事・盧草拙のもとに寄せられた諸家の書簡を集めた『盧氏文書』は、この問題を解決するために有効な資料と思われるが、未翻刻であり、これまでほとんど世に知られていない。本資料を詳細に分析・検討することで、十七世紀＝朱子学・陽明学という通説を相対化する。

（２）むろ きゅうそう けんざんれいたくひさく 室 鳩 巢『兼山麗澤秘策』（写本一五冊、東京大学ほか蔵）

あおち けんざん れいたく 幕儒・室鳩巢が、金沢にいる弟子の青地兼山・麗澤兄弟に宛てた書簡を中心に編纂された『兼山麗澤秘策』には、同僚の幕儒たちの言動、およびその評判などが忌憚なく記されており、この時期の儒学界の動向を考えるうえで重要である。本書はつとに「日本経済大典」第六卷（昭和三年刊）に翻刻が収録されており、従来の研究でもしばしば取り上げられてきたが、本書には多く

の諸本があり、記述の出入りや本文異同等については、再度検討する必要がある。本研究ではこの点に留意しながら、まずは本文の見直しを図り、そのうえで、十八世紀前半における朱子学派の動向、およびその儒学界における位置づけを考える。

(3) 湯浅常山『先君子与仲龍書』(写本二冊、正宗文庫蔵)

備前岡山の人で、古文辞学の流れを汲む儒学者・湯浅常山が、同僚の朱子学者・井上四明に宛てた書簡を編纂したものに、『先君子与仲龍書』なる資料がある。本書には、古文辞学派を中心とする当代の学者やその学問、古今の書物などについて詳しい論評が展開されており、大いに注目される。本書は未翻刻であることはもちろん、その存在さえも世にほとんど知られていない。よって、まずは本書を翻刻紹介するとともに、古文辞学派と朱子学派という、学派の枠を越えた交流がいかに行われたかという問題を中心に考察を深める。

(4) 「書簡・雑記索引データベース」の実験的構築

上記A～Cの資料は、個々の独立したデータとして成立しているが、それぞれに共通の人名や書名などが登場するため、それらを統合的に利用できることが望ましい。このような観点から、これらの資料群の特徴でもある、人名・書名・事項などの情報について、横断的に検索できる索引データベースを構築する。索引である以上、基になる文献の数量は多ければ多いほどよいが、今回は実験的にこの三点を取り上げて、その有効性を確かめたい。

3. 研究の方法

本研究は、上記(1)～(4)の研究テーマを、以下のような方法で実施した。

(1) 『盧氏文書』の研究

①概書の伝本は、九州大学附属記録資料館古賀文庫と、長崎歴史文化博物館渡辺文庫本が知られている。それぞれの資料をデジタルカメラで撮影した。

②大学院生三～四名をアルバイトとして雇用し、古賀文庫本を底本として翻刻作業を行った。

③研究代表者が、それらの原稿と画像と突き合わせながら、三回にわたって厳密な修正を行った。それと並行して、書名・人名索引を作成した。

④内容研究のため、東京・関西・その他の地方への書誌調査を行うとともに、必要な書籍・資料を入手し、考察を行った。

(2) 『兼山麗澤秘策』の研究

①大学院生四～五名をアルバイトとして雇用し、「日本経済大典」第六巻所収の活字本を底本として、人名・書名データベースを作成した。

②諸本調査は、新型コロナウイルス感染対策のため、不可能であった。その分、当初予定にはなかったが、大学院生三名をアルバイトとして雇用し、上記活字本の全文翻刻を行った。

(2) 『先君子与仲龍書』の研究

①全文翻刻する予定であったが、思いのほか難読箇所が多く、かつコロナ禍のため原本の確認に行くこともできず、研究方法の変更を迫られた。そこで人名・書名を中心に、できる限り重要

な事項を抽出する「ノート」を作成することにした。

②さらにこれを補うため、大学院生三名をアルバイトとして雇用し、『先君子与仲龍書』と内容的に同性格といえる、『文会雑記』および『護園雑話』の全文翻刻を行った。

(4) 「書簡・雑記索引データベース」の実験的構築

上述のように、『盧氏文書』『兼山麗澤秘策』については書名・人名索引データを作成できたが、『先君子与仲龍書』については、いまだ調査中である。

4. 研究成果

(1) 『盧氏文書』の研究

本研究期間中に、九州大学附属記録資料館古賀文庫本の全画像、その全文翻刻、および研究論文を収めた、『盧氏文書 一盧草拙関係資料』（雅俗研究叢書IV、雅俗の会、2019年）を刊行した。

盧草拙の祖父は中国福建省からの渡来人、父は医者であった。草拙は長崎聖堂の学頭および書物改添役として、聖堂祭酒である向井元成をよく補佐した。長崎には盧氏のような渡来人の子孫も多く、そこには独自のコミュニティおよび文化が形成された。漢学ひとつをとってみても、書物による知識に偏向した日本のそれとは異なり、土俗的な信仰や思想と結びついた、いわば「本場」の漢学が展開したのである。草拙はまさしくそのような長崎漢学コミュニティの中心にいた人物であることが、今回の研究によって浮き彫りになった。

(2) 『兼山麗澤秘策』の研究

「日本経済大典」第六巻所収の活字本を底本として、「兼山秘策：人名・書名簡易索引」の構築作業を行い、自身の研究用ウェブページ「閑山子LAB」(※)にて公開した。これによって、鳩巢がどのような人物とつながり、どのような交流をしていたか、あるいはどのような書物に関心をもっていたかが、大まかにつかめるようになった。ただし、同一書名・同一人物のいわゆる「名寄せ」には至っておらず、継続して作業を進めるつもりである。

また、本作業と並行して、『兼山麗澤秘策』本文の全文テキストデータを作成した。こちらは現在、すべてのデータ入力作業を完了し、本年度中の公開へ向けて最終的なチェックを行っているところである。徂徠学派の人々に対する忌憚のない批判や、新井白石をはじめとする木門諸儒との議論には、鳩巢の学風のみならず、人柄までが滲み出ていて興味深いものがあり、『駿台雑話』との比較など、今後の研究を大いに進展させるものとなるだろう。

さらに、『兼山麗澤秘策』のなかの記事について、学術雑誌に小文を発表した（「名儒の愚息—『兼山秘策』覚書—」、『雅俗』第17号、2018年）。水戸藩儒の安積澹泊、幕儒の深見玄岱、そして鳩巢の、それぞれの子息に関する逸話を紹介したものである。

※<https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~kawahira/#library>

(3) 『先君子与仲龍書』および徂徠学派の研究

『先君子与仲龍書』の中から、人名・書名を中心に、興味深い記事を抜粋する作業を行った。本資料は、岡山県備前市の正宗文庫にしか所蔵されない稀覯の写本資料で、その文字の解読はなかなか容易ではない。加えて、コロナ禍にともなう出張制限のなかで、原本の目視による調査が不可能であったこともあり、その作業は遅々として進んでおらず、現時点でもまだ八割程度しか終了していない。しかしそれでも、特に常山が岡山藩のなかで、儒学者としてどのような待遇を

受けていたか、藩の政治に対してどのような意見を持っていたか、同時代の学者についてどのような見解を有していたか、などといった問題についての有用な知見を得ることができた。今後も作業を継続し、全容の把握につとめたい。

また、上記テーマを補完する研究として、当初の予定にはなかったが、湯浅常山の『文会雑記』と、著者未詳の『護園雑話』をテキストデータ化し、前記ウェブサイトにて公開した。両資料ともに徂徠学派の人々の言行や逸話を筆録したもので、本研究で取り組んでいる常山の『先君子与仲龍書』と内容的に深く関わる。つとに「日本随筆大成」「続日本随筆大成」などに翻刻が備わっているが、テキストデータは公開されていなかった。

(4) その他

上記のほか、本研究と関連する業績は以下のとおりである。近世期の「書簡・雑記」、およびそれに類する「随筆」資料を使用したものである。

① “Kenko’s Theory of Kosyoku” (口頭発表、Association for Japanese Literary Studies、2020年)、『徒然草 無常観を超えた魅力』、中央公論社、2020年)

鳩巢の随筆『駿台雑記』所掲の兼好、徒然草関連記事に考察を加えた。『駿台雑話』は刊行されたものであり、『兼山麗澤秘策』のような写本との記述姿勢とは明らかに違う傾向があることが再認識された。

② 「「つれづれ」とは何か・補説」(『語文研究』第130・131合併号、2021年)

前記『徒然草 無常観を超えた魅力』に書いた第1章「「つれづれ」とは何か」を補足したものである。近世初期の随筆的仮名草子『ひそめ草』、同じく近世初期の儒学者・堀孤山の随筆『本朝鶴林玉露』などを使用した。

③ 「洒落・平淡・かるみ—蕉門俳論と宋代詩論—」(『日本文学研究ジャーナル』第18号、2021年)

松尾芭蕉とその門人たちの「かるみ」の言説が、宋代の儒学者の言説や詩論で展開された「洒落」の説と通底することを考証したものである。『不玉宛去来書簡』などの書簡類、近世初期の儒学者の随筆・雑記類(永田善斎『膾余雑録』、長岡恭斎『恭斎備忘録』、那波活所『活所備忘録』)などを使用した。

④ 「ひねくれ者の美学 —一三七段をめぐる—」(口頭発表、中世文学会春季大会、2021年)

徒然草・第一三七段が、室町時代から近代にかけてどのように受容されてきたかを考察したものである。近世中・後期における国学者の受容の代表例として、本居宣長の随筆『玉勝間』を取り上げた。

以上、四年間の研究成果としては、十七～十八世紀の重要な書簡・雑記資料、とりわけ儒学者系の資料を翻刻できたこと、またそのデータをウェブ上に公開できたことが大きい。これによって、次年度以降の「近世随筆」にかんする研究(科研費・基盤Bに採択)の基礎を固めることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 川平敏文 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 名儒の息 『兼山秘策』覚書 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 雅俗 | 6. 最初と最後の頁 132-133 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 川平敏文 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 洒落・平淡・かるみ 蕉風俳論と宋代詩論 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル | 6. 最初と最後の頁 63-78 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 川平敏文 | 4. 巻 130・131 |
| 2. 論文標題 「つれづれ」とは何か・補説 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 語文研究 | 6. 最初と最後の頁 249-263 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 川平敏文 |
| 2. 発表標題 Kenko's Theory of Kosyoku |
| 3. 学会等名 Association for Japanese Literary Studies（国際学会） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 川平敏文 |
| 2. 発表標題 ひねくれ者の美学 一三七段をめぐって |
| 3. 学会等名 中世文学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 川平敏文 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 中央公論新社 | 5. 総ページ数 286 |
| 3. 書名 徒然草 無常観を超えた魅力 | |

| | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 著者名 川平敏文 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 雅俗の会 | 5. 総ページ数 137ページ |
| 3. 書名 盧氏文書 盧草拙資料集 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究代表者の研究用Webサイト「閑山子LAB」(<https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~kawahira/>)にて、『文会雑記』『竹園雑話』『兼山秘策：人名・書名簡易索引』のデータを公開した。

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|